白夜行　第三章、第四章のまとめ

時間：１９７９年

（追記あり）
１９７４年
発見：雪穂が進級している（小学６年生）ので、翌年→５月２２日
被害者：西本文代
発見者：田川敏夫（西本宅のアパートを管理している不動産屋）
なにが：事故？自殺？
どこで：西本文代宅（玄関・窓はすべて施錠されていた）
どうやって：ガスレンジの鍋（味噌汁）の吹きこぼれによる、ガス中毒（１９７０年代は同様の事故死が多く、その後、ガス自体が改善された）
犯人：被害者本人による過失

１９７９年
発見：７月第２週の水曜日（７月１１日）、午後２時ごろ
被害者：花岡夕子
発見者：ホテルの従業員
なにが：変死体（病死体）
どこで：ホテルの部屋のベッドの上
どうやって：性交中の心臓発作と思われる
犯人：なし
その他：死亡推定時刻は前夜（火曜日）の１１時ごろとされるが、ホテルのボーイがその部屋の女性を確認した時間から割り出された

第三章　事件について（抜粋）　第三者視点：園村友彦、西口奈美江

高校二年の園村と村下は、クラスメートの桐原亮司から、破格のアルバイトを持ちかけられた。主婦の話し相手をして、三時間で一万円というものだった。

「ー前略ーこんなええバイトは、アルバイトニュースを隅から隅まで読んでも、絶対にない。誰だってやりたがる。ただし誰にでもできる仕事やない。そういう意味で、おまえらはすごくラッキーなんや。俺の眼鏡にかなったわけやからな」P142

結局、二人はアルバイトを引き受けた。
亮司は万事につき用意周到だった。

一人が四日前に餃子を食べたと言えば、ペパーミントガムを渡し、携帯していたスポーツバッグには、ヘアブラシにヘアスプレーにドライヤーを用意していた。
主婦が気に入らなければ金にならないとはいえ、金が絡むことに対する責任感や委細ない様子が伺える。
とあるマンションの一室で、三人の女性に引き合わされた。
亮司はまめまめしく動きまわり、ビールやつまみ、ピザなどを次々に用意した。
三十分が過ぎた頃、８ミリ映画が始まった。
音声こそなかったが、ラブホテルの一室を隠し撮りしたような映像＝つまり無修正の映像、だった。
主婦たちははしゃいだ声をあげて、男たちの反応を楽しんでいるようだった。
そんな中、一人の女性が気まずく席を立ち、出て行った。

ショートヘアの女がくすくす笑った。「彼女には刺激が強すぎたかな」
「三対二で、自分だけあぶれたからやないの。リョウがちゃんと相手をしてあげへんから」
ポニーテールの女がいった。声に優越感のようなものが混じっていた。
「様子を見てたんですよ。けど、あの人には無理みたいでした」
「せっかく誘ってあげたのに」とショートヘアの女。
「まあいいじゃない。それより続きを始めてよ」
「ええ、今すぐに」桐原は映写機のスイッチを入れた。P154

８ミリ映画を三本見た後、セックスが始まった。
ー中略ー
二人の高校生はそれぞれの相手に指導されるまま、生まれて始めてのセックスを経験した。P157

そして三時間後、お開きになった。
亮司は男二人を近くの喫茶店に連れて行き、報酬を渡した。

「嫌やなかったら、これからもひとつよろしく頼むわ。あの二人はおまえらが気に入ったみたいやから、もしかしたらまたお呼びがかかるかもしれん」桐原は満足そうにいったが、すぐに厳しい顔つきになって付け加えた。「念のためにいうとくけど、絶対に個人的に会うたりするなよ。こういうことは、ビジネスライクにやってるうちはアクシデントも少ない。妙な気を起こして単独プレイに走った途端、おかしなことになる。今ここで俺に約束してくれ。絶対に個人的には会うな」P158

二人は約束した。
園村友彦は、彼の相手をした女性から連絡先のメモを渡されていたが、亮司には言い出さなかった。

この日、一人先に抜けた女性—西口奈美江は、あの部屋に腕時計を忘れたことに気づいた。
深夜、人目をしのぶように来た道を辿る。
隠された合鍵で中に入った奈美江は、腕時計を探しながらも、奇妙なテレビ画面に釘付けになった。

画面の動きはインベーダーゲームほどスムーズなものではなかった。しかし次々に襲ってくる障害物を見事にかわすロケットの動きには、つい見とれてしまうものがった。事実彼女は見とれていたのだろう。だから小さな物音にも気づかなかった。
「気に入ったようやな」
突然後ろから声をかけられ、奈美江は小さな悲鳴をあげた。振り返るとリョウと呼ばれた青年が立っていた。P166

亮司は傍らのキーボードを叩き、画面のロケットを操作して見せた。
奈美江は忘れ物を捜しに来たことを思いだす。

「勤続十年記念、大都銀行昭和支店・・・か。堅い仕事をしてるんやな」
ー中略ー
「これやろ、忘れ物は」
一瞬、とぼけようかと思ったが、彼女はそれを受け取っていた。「・・・ありがとう」P167

奈美江は、亮司があんなバイトをしていることを性行為と性欲のためと揶揄したが、亮司は「金のため」と割り切った様子だった。

「あたしにはわからないな。やっぱり、もうおばさんね」
テーブルの前を通り過ぎ、玄関に向かおうとした時だった。
「おねえさん」彼が声をかけてきた。
奈美江は靴を履こうと片足を浮かせていた。その姿勢のまま振り返った。
「面白い話がある。一口乗れへんか」
「面白い話？」
「ああ」彼は頷いた。「売れるはずのものを売る話や」P171

事件が起こったのは、７月だった。

夏休みが近づいていた。七月に入って第二週目の火曜日だった。P171

園村友彦は、亮司との約束を破り、ポニーテールの女性＝花岡夕子と定期的に会い、肉体関係を重ねていた。

約１ヶ月続いた頃、彼女は衝撃的なことを告げる。
彼女の夫に、浮気相手の存在がばれた形跡がある—いままでのように会えなくなるだろう。

「今度会えるのは、いつやろ」
「いつかしらねえ。早いとええんやけど。ー後略ー」
友彦は彼女の細い身体を抱きしめた。そして若さに任せ、執拗に責め続けた。
ー中略ー
彼女は何度か絶叫した。その際には身体を弓のように後ろへ反らせ、両手両足を伸ばし、痙攣させた。
異変は三度目の性行為を終えた後に起こった。
ー中略ー
彼女は裸の半身を起こしかけた。ところが「うっ」という小さな声を漏らしたかと思うと、ぱたんとまたベッドに寝てしまった。
ー中略ー
彼は彼女の薄い胸を触った。だが事態は彼の想像した通りだった。心臓の鼓動が感じられなくなっていた。P178-179

その後、彼はホテルから救急車も呼ぶことができず、部屋を後にする。
ホテルの鍵を持ったまま、ということに気づいたのは、自宅近くになってからだった。
明るい将来は望めないと考えながら、警察の捜査が始まれば、自分にたどり着き、花岡夕子との出会いも問題になるだろう。
亮司へ相談しようと電話をかけても、言葉が出てこず、亮司が園村の自宅に来ることになった。

「全部や。全部話せ。たぶん俺を裏切ったんやろうから、まずはそのことからや」
桐原のいう通りだったので、友彦は返す言葉がなかった。
ー中略ー
桐原は顔の表情を殆ど変えなかった。だが話を聞くうちに怒りがこみあげてきているのは、そのしぐさから明らかだった。指の骨を鳴らしたり、時折畳を拳で殴ったりした。そして今日のことを聞いたときには、さすがに形相を変えた。
「死んだ？　ほんまに死んでしもたのか」
「うん。何度も確かめたから、間違いない」
桐原は舌打ちした。
ー中略ー
「俺、何もかも本当のことをしゃべるつもりや」友彦はいった。「あのマンションでのことも、当然話すことになると思う」
桐原は顔をしかめ、こめかみを掻いた。
「それは困るなあ。話が中年女の火遊びだけではすまんようになる」
ー中略ー

「今度は俺のバックにおる人間が黙ってへんやろな」
「バック？」
「俺が一人で、ああいう商売をしてるとでも思ってたんか」
ー中略ー
そして次の瞬間、友彦は彼に襟首をつかまれていた。
「とにかく」と桐原はいった。「自分の身がかわいいんなら、余計なことはしゃべらんほうがええ。世の中には、警察よりも恐ろしいものがいくらでもある」
凄みのある声と口調に、友彦は言い返せなくなっていた。P182-184

このままでは園村は警察や得体の知れないモノからも、追いかけられていただろう。
だが、亮司が彼の愛用のパソコンを見つけたことから、状況は一変する。

「なかなかええ機械を持っているやないか」桐原はしゃがみこみ、友彦のパーソナル・コンピュータを観察した。
ー中略ー
「何か作ったプログラムはないんか」
「ゲームのプログラムやったらあるけど」
「ちょっと見せてくれ」
ー中略ー
気迫に押され、友彦は本棚からファイルを取り出した。そこにはフローチャートやプログラムを記した紙がまとめてある。それを桐原に渡した。
桐原は真剣な眼差しで、しばらくそれらを眺めていた。
ー中略ー
「俺のいうとおりにするんやったら助けたる。警察に呼ばれることもない。あの女が死んだことおまえとは、全然関係がないということにしたろやないか」
「そんなことができるのか」
「俺のいうこときくか」
「きくよ。何でもきく」友彦は首を縦に振った。
「血液型は？」
「血液型？」
「おまえのや」
「ああ・・・O型やけど」
「O型・・・好都合や。ゴムは使たんやろな」
「ゴムって、コンドームのことか」
「そうや」
「使たよ」
「よっしゃ」桐原は改めて立ち上がり、友彦のほうに手を出した。「ホテルの鍵を寄

越せ」P185、186

その後、亮司がなにをしたのか、園村は知らされなかった。
二日後の夕方、園村宅に二人組みの刑事がやってきた。
それは、花岡夕子の夫が園村の存在を突き止めていた証拠だろう。
刑事は園村を連れて公園へ移動して、花岡夕子の写真を見せた。
案の定、二人の出会い、どのような付き合い方をしていたのか、を聞いてきた。
そして、改めて一昨日の夜の行動の確認を始めた。

「一昨日の夜やけど」開襟シャツの刑事が口を開いた。「学校が終わってから、どこへ行った？」
ー中略ー
「家に帰ったのは？」
「七時半頃です」
ー中略ー
「あ・・・ええと、八時頃に友達が遊びに来ました。同じクラスの桐原という奴です」P191

園村は十一時から十二時まで友達と電話で話しているが、それは相手からかかってきたものだった。
その時間より前に、園村は留守である友達に電話して、家人に電話をもらいたい旨を言付け、相手からの電話を受けたものだった。
当然ながら、これが亮司からの指示であり、アリバイ工作だった。
刑事たちは、園村に血液型を確認した。
「間違いないです。うちの親が二人ともＯ型ですし」
刑事たちが急激に興味を失っていくのを友彦は感じた。その理由がよくわからなかった。P192

さらにその四日後、花岡夕子の夫が現れた。
案の定、肉体関係を疑われたが、白を切りとおした。

この日以後、花岡夕子の夫は友彦の前に姿を現さなかった。また南署の刑事たちが来ることもなかった。P196

八月半ば、園村は亮司と連れ立って例のマンションに行った。
充満していた化粧品のにおいはなく、代わりに四台のパーソナル・コンピュータと十数台の周辺機器があった。
また、思いがけない人物、アルバイトの初日に途中で抜けた女性—西口奈美江が入ってきて、亮司と親しげに話していた。

「無限企画？」
「俺らの会社の名前や。とりあえず、コンピュータゲームのプログラムを売る。カセットテープに保存して、通信販売するわけや」
ー中略ー
「これが目玉商品や」
そこにはプログラムが印刷されていた。友彦には手におえそうにないほど、複雑で長いプログラムだった。『サブマリン』という名前がつけられていた。
「このゲーム、どうしたんや。桐原が作ったのか」
「そんなことはどうでもええやろ。—ナミエ、このゲームの名前、考えたか」
ー中略ー
「マリン・クラッシュ」ナミエは遠慮がちにいった。
ー中略ー
桐原は腕組みをして考えていたが、やがて頷いた。P200

商売の準備に慌しい亮司は、二人を残して部屋を出て行った。
二人は亮司を話題にして、園村はふと疑問を口にする。

「花岡夕子さんのこと？」
「まあね」彼は頷いた。彼女も事情を知っているとわかり、内心ほっとした。「狐につままれたみたいっていうのは、こういうことをいうんやろうな。いったい、あいつはどうやって、あの事件を始末したんやろ」P201

花岡夕子がチェックインした翌日、チェックアウトされなかった部屋を、ホテルの従業員がマスターキーで開けた。
全裸でベッドに横たわった死体を発見して、警察に通報された。
他殺の疑いは低く、死亡推定時刻は前夜の十一時頃と割り出された。

「ルームサービス係に、バスルームにシャンプーがないから届けてほしいと女性の声で電話があったらしいのよ。それでボーイが届けに行ったところ、花岡夕子さんがシャンプーを受け取ったそうよ」
「いや、それはおかしい。俺がホテルを出た時—」
友彦が言葉を止めたのは、ナミエがかぶりを振り始めたからだ。
「ボーイがいってるのよ。たしかに十一時頃、女性のお客さんにシャンプーを渡したってね。あの部屋の女性客となると、花岡夕子さんということになるじゃない」
ー中略ー
では誰が花岡夕子に化けたのか。
ー中略ー
するとナミエは笑いながら首を振った。

「あたしじゃない。そんな大胆なこと、あたしには無理。すぐにぼろを出しちゃう」
「そしたら・・・」
「それについては、考えないほうがいいわね」ナミエは、ぴしりといった。「それはリョウしか知らないこと。どこかの誰かがあなたを救ってくれた。それでいいじゃない」
「けど」
「それからもう一つ」ナミエは人差し指を立てた。「警察は花岡夕子さんの旦那さんの話で、あなたに目をつけた。でもすぐにあなたには興味を失った。なぜだかわかる？　それはね、現場から見つかったのは、ＡＢ型の痕跡だったからよ」
「ＡＢ型？」
「精液」ナミエは瞬きもせずにいった。「夕子さんの身体から、ＡＢ型の人物の精液が検出されたというわけ」
「それは・・・おかしい」
「そんなはずはないといいたいんだろうけれど、それが事実なんだから仕方がないでしょ。彼女の膣の中には、たしかにＡＢ型の精液が入っていたの」
入っていた、という表現が引っかかった。それで友彦は、はっとした。
「桐原の血液型は？」
「ＡＢ」そういってナミエはうなずいた。
友彦は口元に手をやった。軽い吐き気を催した。真夏だと言うのに、背中が寒くなった。
「あいつが死体に・・・」
「何があったかを想像することは、あたしが許さない」ナミエはいった。ぞくりとするほど冷たい口調だった。目もつり上がっていた。P202-204

そして、また部屋に入ってきた亮司に、園村は「俺、なんでもする。おまえのためやったら、どんなことでも」といった。

第４章　事件について（抜粋）　第三者視点：中道正晴

唐沢雪穂は、いささか弱点の数学を補うため、北大阪大学工学部電気工学科の学生＝中道正晴に家庭教師をお願いしていた。
毎週火曜日の夜七時から二時間、三月から続いていた。
雪穂の母は、雪穂を大人しい娘だと思っているが、中道はそうではないことを知っている。

印象的なことがある。あれは七月だった。いつものように二時間ほど勉強を教えた後、出されたコーヒを飲みながら雪穂と雑談をしていた。
ー中略ー
彼女に電話がかかってきたのは、雑談を始めてから五分ほど経った頃だ。礼子が呼びに来て、「

英語弁論大会事務局の者です、といっておられるんだけど」といったのだ。
「ああ、わかった」雪穂はうなずいて、階段を下りていった。
ー中略ー
唐沢家を辞去した後、正晴は四天王寺前駅のそばにあるラーメン屋に入り、遅い夕食をとった。火曜日は、そうするのが習慣になっている。
餃子とチャーハンを食べながら店のテレビを見ていたが、ふと何気なくガラス窓越しに外を眺めた時、若い女性が一人、通りに向かって小走りに駆けてくるのが見えた。正晴は目を見張った。それは雪穂にほかならなかったからだ。
何事だろう、と彼は思った。彼女の表情にただならぬ気配を感じたからだ。彼女は通りに出ると、急いだ様子でタクシーを拾った。
時計の針は十時を指している。P216、217

中道は、気になって唐沢家に電話を入れると、雪穂の母が電話に出て、雪穂はもう寝たと告げた。
雪穂が母親に黙って家を抜け出したと察した中道は、急いで電話を切り、雪穂を案じた。
翌日、雪穂から中道に電話があった。

「いや、別に用はなかったんだ。ただ、何かあったのかと思って、心配になってさ」
「何かあったのかって？」
「血相変えてタクシーに乗るところを見たからさ」
案の定、彼女は一瞬絶句した。その後、低い声で訊いてきた。「先生、見てたんだ」P219

雪穂の友人が失恋の末、自殺未遂を起こし、友人たちで駆けつけるために急いでいたが、ショッキングな話なので、雪穂は母親に黙っていた、と話した。

中道は、北大阪大学工学部電気工学科第六研究室にいた。
第六研究室の学生と大学院生が、研究の合間に作ったパーソナル・コンピュータ用ゲーム『サブマリン』と、ほぼ同一のゲーム『マリン・クラッシュ』というゲームが問題になっていた。

「俺らの中の誰かが、この『無限企画』っていう会社に、『サブマリン』のプログラムを流したとしか考えられへん」
「まさか」
「ほかにどういうことが考えられる？　『サブマリン』のプログラムを持ってるのは、作ったメンバーだけで、めったなことでは他人に貸さへんことになっているんやぞ」
ー中略ー
「誰かが抜けがけして、あれを業者に売ったなんて、とても考えられませんけど」
ー中略ー
「本人知らないうちに、誰かにプログラムを盗まれたと言うことも考えられます」

「犯人はメンバーやのうて、その周りにいる人間というわけか」
ー中略ー
また別の一人は、「どうせ売るなら、自分たちの手で売りますよ。みんなに相談してね。だって、そのほうが絶対に儲かるから」といった。
ー中略ー
「全員、もういっぺんよう思い出してみてくれ。俺らでなかったら、俺らの周りにいる誰かが、勝手に『サブマリン』を売り飛ばしたということなんやからな。で、それを買い取った奴が、堂々とそれを売って商売しとるということや」美濃部は悔しそうな顔でそういい、皆を見回した。
ー中略ー
それにしも、と彼は全く別の感想を今度のことで持っていた。自分たちが遊ぶ目的で作ったプログラムが、こんなふうに商売になるとは全く思わなかった。もしかしたらこれは、新しいビジネスなのかもしれない—。P224-226

中道は、図書館にいるとき、新聞の縮刷版で、雪穂の実母の事件の報道を目にする。
雪穂の母から聞いた話とほぼ一致していた。
そして、クラブの後輩が事件の第一発見者の近所に住んでいる、と知るや連れ立って話を聞きにいく。
いくつか新聞には掲載されていなかった事実を聞いた。
火曜日、雪穂の家庭教師の日である。
雪穂が中座した時、棚にあるカセットテープに目を留めた。
『サブマリン』漏洩に関して、仲間内では流出経路をいろいろ考えていたが、雲をつかむような話で、まったく成果はあがっていなかった。

彼自身は、『サブマリン』のことを他人に話したことは殆どない。
ー中略ー
ただ、一度だけそういうゲーム作りの話を、全くの部外者に話したことはある。その相手は、ほかならぬ雪穂だった。ー中略ー
「わあ、面白そう。どんなゲームを作ってるの？」
正晴は紙に『サブマリン』の画面の絵を描き、ゲームの内容を説明した。雪穂は真剣に聞き入っていた。
ー中略ー
「そのゲーム、あたしもやってみたいな」彼女はいった。
ー中略ー
「どこかにパーソナル・コンピュータがあればいいんだけどね。だけど俺の友達でも持っているやつはいない。高いからね」
「それがあればできるの？」
「できるよ。テープに記録したプログラムを入れてやればいい」
ー中略ー

正晴は記憶媒体としてテープが使われていることを雪穂に説明した。彼女はなぜかそんなことに興味を示した。
「ねえ先生、そのテープを一度見せてくれない？」
「えっ、テープを？　そりゃあいいけどさ、見たって仕方ないぜ。だってふつうのカセットなんだから。君が持ってるのと同じだよ」
ー中略ー
がっかりされるのを承知で、正晴はその次の時にテープを家から持ってきた。
ー中略ー
「このテープに、そういう使い途があるなんて初めて知った。ありがとう」雪穂はテープを彼に返した。「大事なものなんでしょ。忘れるといけないから、今すぐバッグに入れてきたほうがいいよ」
「ああ、そうだな」たしかにそのとおりだと思い、正晴は部屋を出て、一階においてあるバッグの中にテープをしまった。P243-246

中道が部外者に『サブマリン』を見せたのはこの一回かぎりだった。
雪穂には確かに『サブマリン』を記録したテープを盗み出す機会は作れたかもしれないが、パーソナル・コンピュータを持ってないのだから、複製を作ることは出来ない。
ゆえに彼女ではありえない、と結論している。

亮司（本文抜粋）
桐原は、ややつり上がった目で向かいの二人を眺めながら、右手の人差し指でテーブルの表面をこつこつと叩いた。まるで値踏みするような目つきだたので、友彦は少し不快になった。P139

桐原は同じクラスの生徒だった。だが進級から二ヶ月近くが経つというのに、殆ど言葉を交わしたことがなかった。
ー中略ー
むしろ桐原のほうに、他人に対して壁を作っている気配があった。P144

「お友達ね」女が桐原にいった。
「そうです。二人とも、いい男でしょう」
彼の言葉に、女はふふっと笑った。P148

「すみません。いろいろと段取りがあったものですから」桐原は笑顔で謝った。P149

その桐原は、最後までセックスに加わってはこなかった。女たちも誘おうとはしなかったから、それは最初から決められていたことだったのだろう。だが彼は部屋を出ていこうともしなかった

。
ー中略ー
桐原は薄暗い中で足を組み、壁のほうを向いたまま、静かに煙草を吸っていた。P157、158

「何のためにあんなバイトをしてるの？　お金が目的？」
「ほかに何がある？」
ー中略ー
「生意気。どうせ子供の遊びのくせに」
「何やて？」リョウがじろりと睨んできた。
ー中略ー
「奥様方の玩具になって喜んでるだけでしょ。相手を満足させる前に出しちゃったりするんじゃないの」
ー中略ー
「出してみろよ」
奈美江の顔を両手で挟み、ペニスをその前に突き出しながら彼はいった。
ー中略ー
奈美江は両手で彼の太ももを押し、同時に顔をそむけようとした。
「どないした。子供のちんぽにびびってるんか」
奈美江は目を閉じ、呻くようにいった「やめて・・・ごめんなさい」
数秒後、彼女は身体を突き飛ばされていた。見上げると、彼がジッパーを上げながらダイニングテーブルに戻るところだった。椅子に座り、さっきと同じように弁当を食べ始めた。箸の動きに苛立ちが表れていた。
ー中略ー
「どうして・・・」彼女は口を開いた。「ほかにいくらでもバイトはあると思うのに」
「俺は単に、売れるものを売ってるだけや」P169-171

そして電話を切ってから本当にジャスト二十分後に桐原は現れた。玄関に迎えた時、友彦は彼がバイクに乗れることを知った。P181

「なかなかええ機械を持ってるやないか」桐原はしゃがみこみ、友彦のパーソナル・コンピュータを観察した。「プログラムはできるのか」
「ベーシックなら大体」
「アセンブラはどうや」
「少しできる」答えながら、こいつはコンピュータに詳しいのかなと友彦は思った。ベーシックもアセンブラも、コンピュータ言語の名称だった。P185

桐原は真剣な眼差しで、しばらくそれらを眺めていた。やがてファイルを閉じ、同時に自分の瞼も閉じた。そしてそのまま動かなくなった。

どうしたんやと声をかけようとして友彦はやめた。桐原の唇が、何かをつぶやくように動いていた。
「園村」やがて桐原が口を開いた。「助けてほしいか」
ー中略ー
「俺のいうとおりにするんやったら助けたる。警察に呼ばれることもない。あの女が死んだことおまえとは、全然関係がないということにしたろやないか」P185、186

不自然に平静を装うとはしなかった。それが桐原のアドバイスでもあった。
「高校生が刑事を前にして平然としとったら、そっちのほうがおかしいからな」と彼はいった。P187

「桐原、いったいどうなってるんや。おまえ、何かしたんか」
「おまえはそんなこと気にするな」
「けど—」
言葉を継ごうとした友彦の肩を、桐原ぽんと叩いた。
だがあの時と違うのは、桐原が自分で部屋の鍵をあけたことだった。彼の持つキーホルダーには、鍵がいくつもぶら下がっていた。
ー中略ー
昨夜急に桐原から電話がかかってきて、見せたいものがあるから明日付き合ってほしいといわれた。理由を訊くと、秘密だといって桐原は笑った。彼が冷笑以外の笑いを示したのは、珍しいことだった。
ー中略ー
「心配するな。もう身体を売れとはいわへん」友彦の内心を察したらしく、桐原はそういって笑った。これは冷笑といえるものだった。
ー中略ー
「さすがに驚いたようやな」桐原は楽しそうにいった。友彦の反応が期待通りだったからだろう。
そこには四台のパーソナル・コンピュータが設置されていた。さらに十数台の周辺機器が繋がれていた。
「どうしたんや、これ」呆然としたまま友彦は訊いた。
「買うたんや。決まっとるやないか」P197、198

『パーソナル・コンピュータ用ゲーム各種通信販売いたします　無限企画』
「無限企画？」
「俺らの会社の名前や。とりあえず、コンピュータゲームのプログラムを売る。カセットテープに保存して、通信販売するわけや」
「ゲームのプログラムか」友彦は小さく頷いた。「それは・・・売れるかもしれへんな」
「絶対に売れる。間違いない」桐原は断言した。P199

「あいつ、学校では全然目立てへんねんで。親しい奴もおらんみたいや。それやのに、裏でこんなことをしてる」
ナミエは彼のほうに向き直った。
「学校なんか、人生のほんの一部分にすぎないじゃない」
「そうかもしれんけど、あいつほどわけのわからん奴もおらへんよ」
「リョウのことはあまり深く詮索しないほうがいいと思うな」P201

本文より推察
桐原亮司は、高校に入学後も、他人と関わろうとしない、孤独を貫いているようだ。
同級生男子に売春を斡旋するという、高校生には無理なアルバイトをして、普通に働くよりも多額の金を得ている。
その際、金を支払う側には愛想よく標準語で話すが、金で雇った側はぞんざいに方言で話している。
亮司にとって、自分の性は売れるモノ＝金と引き換えることができるモノ、と考えている。
マンションの一室を自由に使っていたり、バイクやパソコンという高価なものも持っている。
窮地に陥った園村友彦が、パソコンでのプログラミングが趣味と知るや、わずかな時間で起死回生となる計画を、立案・実行している。
しかし、園村に高圧的な態度をとることはなく、むしろ詳細を語ることを避けていた。
パソコンやゲームのプログラミングについて、同じ目線で語ることができる人間の存在を喜んでいるようだ。
パーソナル・コンピュータ四台、周辺機器十数台、とあるが、資金源は明かされてない。
（１９８０年でも新品は２５万円をくだらないだろうが、中古品が出回っていたとも思えない。総額１００万円以上は必要だっただろう）
そして、どこからか『サブマリン』というゲームプログラムを入手し、新たなビジネスとして会社を立ち上げるべく、奔走している。

雪穂（本文抜粋）
雪穂が英会話クラブに入っているという話を、正晴は思い出していた。彼女が少し話すのを聞いたこともある。中学生のときから英会話塾に通っているというだけあって、見事なものだった。P209

唐沢雪穂が通っているのは、清華女子学園という高校だった。そこの中等部から上がったと、正晴は聞いていた。さらに彼女は、そのまま上の大学に進もうとしている。高校での成績が優秀であれば、面接試験だけで上の清華女子大学に入ることもできるのだ。
ただし希望する学科によっては、門が極端に狭くなるおそれもあった。雪穂は最も競争率が高い

といわれる英文科を希望していた。P210

「その事故で雪穂さんは、完全に身寄りがなくなってしまったわけですね」
「そうなんです。お葬式には私も出ましたけれど、雪穂はお棺にすがりつくようにして、わあわあと声を出して泣いていました。それを見ていると、こちらもたまらなくなりましてねえ・・・」
ー中略ー
「私が雪穂と初めて顔を合わせたのは、あの子の父親の七回忌の時です。その時に少し話をしましたところ、あの子は私が茶道をしていることに、ずいぶんと興味を持った様子でした。あんまり熱心にいろいろと尋ねてくるので、それなら一度遊びにいらっしゃいといってみたんです。あの子のおかあさんが亡くなるより、一、二年前だっと思います。そうしたら、その後すぐにやってきのたで、ちょっとびっくりしました。私としては、ほんの軽い気持ちでいったことでしたからね。でも茶道をやってみたいという気持ちは本気のようでしたし、私も独り暮らしで寂しい思いをしていましたから、半分遊びの気分でお茶を教えてあげることにしたんです。そうしたらあの子はほぼ毎週、バスに乗って一人でやってきました。私がたてたお茶を飲みながら、学校での出来事なんかを話してくれるんです。そのうちに、あの子の来るのが、私にとっての一番の楽しみになりました。都合が悪くて来てくれなかった時なんかは、ひどく寂しい気持ちになったものです」
ー中略ー
「本当にそういう感じでしたね。まあ子供相手ですから、花嫁教室ごっことでもいいましょうか。あの子ったら、私の言葉遣いの真似までするんですよ。恥ずかしいからやめてって頼んだら、家でおかあさんがしゃべっているのを聞いていたら、自分まで汚い言葉を遣ってしまいそうになるから、私のところで直していくんですって」
ー中略ー
「ええ。だから雪穂は、中道先生と話すのは楽だといっておりました。汚い大阪弁を遣う人と話していると、うつらないように気をつけるのが大変だと」
「ふうん、大阪生まれなのになあ」
「あの子はそのこと自体も嫌なんだそうですよ」P212-215

「うん、もう大丈夫。あたしたちの顔を見たら、正気を取り戻したから」
「それはよかった」
「ほんとに馬鹿だよね。たかが男のことで死ぬなんて」
ー中略ー
あの時のやり取りを思い出すと、正晴は今も苦笑してしまう。彼女の口から、「たかが男のことで」などという台詞が飛び出すとは夢にも思わなかった。若い女の子の内面など、他人には想像も出来ないものだと言うことを思い知った。P220

「そんな苦労をしていたせいかもしれんけど、あの雪穂ていう子も、妙に醒めたところがあった

。何しろ母親の死体を見つけたときも、涙は見せへんかったんやからな。あれはちょっとびっくりしたで」
「へえ・・・」
正晴は意外な気持ちで不動産屋の顔を見返した。文代の葬式では、雪穂はわあわあ泣いたという話を、礼子から聞かされていたからだった。P236

こんなふうに髪をかきあげるしぐさが、正晴は大好きだった。白く滑らかな頬を見ていると、思わずキスしたくなる衝動に駆られる。P239

「田川不動産って、生野区にある、あの田川不動産？」彼女は訊いた。表情が強張っていた。
ー中略ー
「でもそこ、生野区にある田川不動産の支店か何かだと思うよ。あの店、お父さんと息子さんがいたから、たぶん息子さんが店を出したんだね」
雪穂の推理は当たっていた。P248

「五月二十二日」と彼女はいった。「それが母の死んだ日。一生忘れない」
ー中略ー
「夢を見てるみたいだった。もちろん悪夢のほうだけど」雪穂はぎこちなく笑ってから、また元の悲しげな表情に戻った。「あの日、学校が終わってから、友達と遊んじゃったの。それで、帰るのが少し遅くなったの。遊ばなかったら、一時間ぐらい早く帰れたかもしれない」
ー中略ー
「そうしていたら、たぶんおかあさんは死なずに済んだと思う。それを思うと・・・」
彼女の声が涙声に変わっていくのを、正晴は身体を固くして聞いていた。P249、250

大粒の涙が白い頬をつたっていくのを、正晴は息を詰めて見つめていた。無性に彼女を抱きしめたくなったが、ここでそんなことができるはずもなかった。P250

もしかしたら雪穂は付き合ううちに、じつの母親に何かあった場合には、この上品な婦人に引き取ってもられるかもしれないという手ごたえを感じていたかもしれない。となると、西本文代が瀕死の状態にあるのを見つけた場合、雪穂はどう行動しただろう。
ー中略ー
今、彼女の涙を見ているうちに、自分がいかにひねくれた精神の持ち主であるかを、正晴は痛感していた。この娘に、そんなことができるわけがないではないか。P251、252

本文より推察
雪穂は英会話を熱心に勉強して、一番進学の難しい清華女子大学英文学科を希望している。
雪穂は、男性に好感を持たれる容姿で、意識しているのかどうか、扇情的ですらあるようだ。
現在の彼女は母の死を悼み、涙も流すが、その死に直面した小学６年生の時は、泣かなかったこ

とが印象に残っている。
養母となる唐沢礼子が同席した葬式では、ずいぶん泣いていたようだが。
雪穂は唐沢礼子から茶道の手ほどきを受けると同時に、標準語、立ち居振る舞い、様々なことを吸収したようだ。
大人しいだけの女性ではなく、時に男や男との恋愛に対して、冷めた目で見ている。
また、中道は、雪穂が実母の死に対して責任を感じている様子から、彼女に対して疑惑を抱いたことを恥じている。
詳細を記憶している様子から、雪穂の中で、母親の事件は、微塵も風化していないと思われる。

西本文代変死事件の追記

西本文代変死事件の追記（本文より抜粋）
雪穂の実母に関する話だ。彼女が六年生ということは、昭和四十九年だ。
正晴は縮刷版の中から四十九年五月の分を選び、机の上で開いた。
ー中略ー
『二二日午後五時ごろ、大阪市生野区大江に市七丁目吉田はいつ一〇三号室の西本文代さん（三六）が部屋で倒れているのをアパートの管理会社の社員らが見つけ、救急車を呼んだが、西本さんはすでに死んでいた。生野署の調べでは、発見当時部屋にはガスが充満しており、西本さんは中毒死を起こしたと見られている。ガス漏れの原因については調査中だが、ガスコンロにかけたみそ汁がふきこぼれており、それにより火が消えたことに西本さんが気づかなかった可能性があるという。』P228-229

「死体を見つけた時よりも、その後のほうが面倒やったな。警察からいろいろと訊かれてなあ」田川は顔をしかめた。
ー中略ー
「部屋に入った時のことや。俺は、窓を開け放して、ガスの元栓を閉めた以外には、どこにも触ってないっていうたんやけど、何が気に入らんのか、鍋に触れへんかったかとか、玄関には本当に鍵がかかってたかとか訊かれてなあ、あれはほんまに参ったで」
「鍋に何か問題があったんですか」
「よう知らん。味噌汁がふきこぼれたんなら、鍋の周りがもっと汚れてるはずやとかいうたな。ー後略ー」
ー中略ー
「ああ、そうや。西本の奥さん、風邪薬を飲んでたんやった」
ー中略ー
「ふつうの量ではなかったんや。空き袋から考えると、一回にふつうの五倍以上飲んだ形跡があったらしい。ー後略ー」
ー中略ー
「睡眠薬代わり・・・か」
ー中略ー
「かなり酒を飲んだ形跡もあったらしい。カップ酒を空けたやつが、ゴミ箱に三つほど入ってたそうや。あの奥さん、ふだんは殆ど酒を飲まへんかったという話やから、これもまた眠るためと考えられるやろ？」
ー中略ー
「部屋の鍵が全部かかってたのはおかしい、という意見があったようや。あの部屋の台所には換気扇がついてなかったから、炊事をする時には窓を開けるのがふつうやないかというわけや」
ー中略ー
「せやから、自殺説を強力に押すほどの根拠とはいわれへん。風邪薬やカップ酒にしてもそうや

。ほかに説明がつかんわけやない。それに何より、あの子の証言があったしな」
ー中略ー
「別にさほど特別なことはいうてへん。おかあさんは風邪を引いてたて証言しただけや。寒気がする時には日本酒を飲むこともあったともいうてた」
ー中略ー
「警察の話では、発見があと三十分早かったら助かったかもしれへんということやった。ー後略ー」P235-239

不動産屋の田川から事件の概要を聞いて以来、じつにおぞましい想像が、ずっと彼の脳裏に潜み続けていたからだった。
その想像とは、真相はやはり自殺だったのではないか、というものだった。
過剰な量の風邪薬の空き袋、カップ酒、不自然に施錠された窓、いずれも自殺を考えたほうがすっきりする話だ。それを阻んでいるのは、ふきこぼれた鍋だけである。
だがその鍋は、ふきこぼれたわりには周りが汚れていなかったと警察ではいっているらしい。
そこで正晴が考えたのは、実際には自殺であったが、何者かが鍋の味噌汁をこぼし、事故死に見せかけたのではないか、ということだ。
ここでの何者かとは、雪穂以外には考えられない。風邪薬やカップ酒の不自然さについて彼女が説明しているという点とも辻褄が合う。
ではなぜ事故死に見せかけたのか。それは世間体を気にしたからだ。今後の人生を考えた場合、母親が自殺したというのは、マイナスイメージにしかならない。
ただし、この想像には恐ろしい疑問がつきまとう。
雪穂が最初に母親を発見したとき、彼女はすでに死んでいたのか、それともまだ助かる段階だったのか、ということである。
田川はいっていた。あと三十分発見が早ければ助かったらしい、と。P250、251

「あのときに、あたしが鍵さえ持っていればって思うの。それなら不動産屋さんに行ったりしなくてもよくて、もっと早くに見つけてあげられたはずだもの」
ー中略ー
雪穂は立ち上がり、ハンガーにかけてある制服のポケットから、鍵を取り出して見せた。
ー中略ー
「そうでしょ。これ、あの時にも鍵に付けてあったの。でもあの日にかぎって、家に置き忘れてたのよ。そういって彼女は鍵を元の場所に戻した。
その時、キーホルダーについていた小さな鈴が、ちりんと鳴った。P252

第一章の最後に描写のあった、西本文代変死体発見の後日談が書かれている。
田川の証言は重要だ。
雪穂が泣いていなかった→田川の背後で涙ぐんだ声では、あった

鍵を持たない雪穂から鈴の音がしていたが、田川からは確認できなかった→雪穂の鍵は、鈴のついたキーホルダーがつけられていた
雪穂が鍵を持っていたのなら、どのように事件は進行したのか。

文代は薬と酒を自発的に飲んだと考えられる。
意識のない状態で嚥下させるのは難しく、変死体で発見された場合は解剖で明らかになるだろう。
異常なしということは、文代自身の意志で飲んだ、ということだ。
娘が第一発見者になることは疑うべくもない状況だが、なにが文代をそこまで追い詰めたのだろうか。
やはり警察の取調べだろうか。
家賃を二ヶ月も滞納していたということは、勤め先はクビになり、次の就職先もままならなかったのか。
そして、日々成長する雪穂を抱え、二間しかない部屋で、鬱屈していったのか。

雪穂は下校後、友達と遊んでから帰宅したというが、警察に訊かれる可能性もあるから、本当だろう。
自宅に帰り、鍵を開ける。
この先の展開は二つ考えられる。

一つは、西本文代がガス自殺をしていた場合。
雪穂は横たわる文代を確認して、朝の残りの味噌汁を薄めてこぼし、自宅に鍵をかけて不動産屋に行く。
この場合、ガスが充満している部屋で行動する不自然さが残る。
一つは、西本文代がガス自殺をしていなかった場合。
雪穂が帰宅すると、文代が風邪薬とカップ酒で、意識朦朧あるいは意識不明だった。
文代の自殺を察し、ガスを開け、家中を施錠して、朝の残りの味噌汁を薄めてこぼし、自宅に鍵をかけて、時間をかけて不動産屋に行く。
田川不動産は、吉田ハイツから徒歩十分とあるから、会話して往復すれば三十分程度の時間を稼ぐことが出来るだろう。

田川は息を止めたままガスの元栓を閉め、調理台の上の窓を開け放った。さらに奥の部屋へ向かった。卓袱台の横で倒れている文代を横目で見ながら窓を開けると、顔を外に出して大きく深呼吸した。頭の奥が痺れるような感覚があった。P82（第一章）

わずか数分で頭に異常を感じているということは、室内のガス濃度は相当高かったと思われる。
調べた限り（業者のホームページ）では、一酸化炭素中毒の場合、五分で頭痛の場合は、三十分で死に至る。

（ただし、西本文代の顔色は薄い青紫色だったため、一酸化炭素中毒ではない可能性がある）
味噌汁は自殺を事故死に見せかけるための偽装なのだから、ガスを点火する必要はない。
鍋があり、周囲にこぼれていて、ガスが開いていれば、ふきこぼれによる事故と推察できる。
他に不自然な点は、遺書である。
文代の死が自殺という歴然とした証拠となるから、仮に遺書があったしても、雪穂が帰宅した時点で、破棄か隠されたと見るほうが自然だ。
発作的な自殺であれば、必ずある、と断言できないが、母子家庭で一人娘を残して自殺するには、いささか納得できない点である。
遺書があるとすれば、文面は雪穂に対する謝罪と考えられるが、いずれにせよ推測の域を出ない。

当時、小学六年生の西本雪穂が、持っていたはずの家の鍵を持ってないと言い、不自然でない第三者の大人に、自宅の玄関を開けさせた。
完全に施錠された室内では、西本文代がガスにより死亡していた。
確かな事実はこれだけだ。